

踏む。大徳慈を垂れ、見苦を離れしむ。故に汝の恩を忘れず、今宵報ゆらくのみ」といふ。時に其の母と長子と、諸の霊を拜まむが為に其の屋の内に入り、万侶を見て驚き畏りて其の到来る所以を問ふ。万侶はに具に前の事を説く母長子を罵りて曰はく「呼矣、我が愛子は汝に殺さる。他の賊にあらざるなり」といふ。すなはち万侶を礼みて、更に飲食を設く。万侶還来りて状を以ちて師に白す。夫れ死霊白骨すらなほし此くの如し。何にいはむや、生ける人にしてあに恩を忘れむや。

女人風声なる行を好み仙草を食ひて現の身に天に飛ぶ
縁 第十三

大倭国宇太郡漆部里に、風流なる女有り。是れすなはち彼の部内の漆部造磨の妾なり。天年風声を行とす。自づから悟りて塩醬を心に存む。七の子を産生み、極めて窮しく食無し。子を養ふに便無し。衣無く藤を綴り、日々に沐浴みて身を潔め綴を著る。毎に野に臨むときは草を採ることを事とす。常に家に住るときは家を淨むることを心とす。菜を採り調へ盛り、子を唱ひ

端坐して咲を含み馴へて言はく「敬を致して食へ」といふ。常に是の行を以ちて身心の業とす。彼の氣調恰も天上の客の如し。是れ難破長柄豊前宮の時甲寅年に、其の風流なる事に神仙感応し、春の野に菜を採り仙草を食ひて天に飛ぶ。誠に知る、仏の法を修はずして風流を好まば仙菓感応すること。精進女問経に云ふが如し「俗家に居住るとも心を端しくして庭を掃かば五の功德を得」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

僧心経を憶持ちて現報を得奇しき事を示す縁 第十四

釈義覺は、本百済の人なり。其の国の破るる時に、後岡本宮に宇御めたまひし天皇の代に当りて、我が聖朝に入りて難破の百済寺に住む。法師の身の長七尺、広く仏の教を学びて心波若経を念誦む。時に同じき寺の僧慧義といふひと有り。独夜半に出で行く。因りて室の中を見れば光明照り耀く。僧すなはち怪び、竊に牖の紙を穿ちて法師を窺看れば、端坐して経を誦み、光口より出づ。僧驚悚り、明日に悔過して周く大衆に告ぐ。時に覺法師弟子に語りて言

第十二縁 あやしき表(し)の説話。善業についで現報説話。今昔物語集・十九ノ三十一に書本。扶桑略記・大化二年条に引用。
一 底本訓釈「履(ふみ)不(ふ)万(ばん)留(りゅう)か」。一 元 底本訓釈「履(ふみ)上音毒反、下音樓反、〇(〇)合か、比止加之良」。二 下卷二十七縁。三 高句麗の僧か。書紀・白雉元年条にも、道登が「高麗」の故事を引いて弁じている記事がある。本書では中卷七縁の智光の弟子が「學生」とされている。
三 大化元年(六四五年)、十師に任ぜられる。白雉元年(六五〇年)、白雉が祥瑞であることを弁じている。宇治橋断碑に「世有釈子、名曰道登、出自山尻、惠満之家、大化二年、丙午之歲、構三立此橋、濟度人畜」とみえる。三 本元興寺。
三 惠満は僧名であろう。四 六四六年。
五 宇治川にかかる。橋の意に用いる「橋」は、荷に由来する文字(箋注倭名類聚抄)。六 底本訓釈「嘗(な)作也」。七 奈良市と京都府との境の丘陵。大和から山城への経路。八 底本訓釈「溪(たに)佐波爾」。元宇治橋断碑に「濟度人畜」とある。原文「為人畜所履」。底本訓釈「畜介毛乃爾」。これより推して、「為一所」の被動は「に」に「らる」と訓んでおく。九 「高燥処」ならざる所に葬られた死屍が、生者に移葬を求め、「高燥処」に葬られて安楽を得た、という説話。異苑七・商仲堪、搜神記十六・文類。底記・三三二・袁無忌、太平御覽七・一八所引幽明録・尋陽參軍などの承譜につらなる。下卷二十七縁。三 十二月の晦の夜には死者の魂がこの世に帰つて来る、とされた(和泉式部統記・四・曾丹東六、徒然草・十九。底本訓釈「晦川支己毛利」。三 底本訓釈「頃己乃己呂」は誤写本文にもとづく。三 今夜でないならば思がえしをする方法が無い。四 底本訓釈「裏内也」。

一 死者の魂のために飲食が供えられている。敦煌本搜神記・侯光侯周、広記・三二〇所引幽明録・任懷仁には類話がみえる。殺された男が死屍に食を供してくれた男に報恩しようとして自分の家に伴ひ行き、死者を祭るために供えられた食を男に食べさせるのだが、その場に自分を殺した男がいるのを見て逃げ出した、とある。二 下卷二十七縁。底本訓釈「饌(くわ)与(よ)久良比(くらひ)乃(なり)」。三 重さの単位。和訓は「六〇リ」。銀は大量ではある(雑金)。大一斤は六〇リ、から七〇リほど。毛 底本訓釈「妬忌二合、宇良也見」。

一 諸霊を拜する時(後夜)は、上卷三縁で童子と鬼とが争った時である。二 ようす。三 中卷十二縁は「豆人必忘恩歟」とし、イメージの結びつきをみせている。

第十三縁 「仏教」を知らない人であっても、そのおこないが仏教にかなえば仏教にかなうものがある。「みさ」なるおこないは仏教にかなうものである、と示される。今昔物語集・二十ノ四十二に書本。

四 国会図書館本訓釈「風声(三左平)」、底本訓釈「風流(二合、美佐乎)」「氣調(三左平)」。本説話では「みさ」の表記を「風声」「風流」「氣調」と変化させている。「風声」「風流」「氣調」は、態度、心の状態を意味する語。評価すべき態度、すぐれた心の状態、をいう。「行」とされているのだから、かなり具体的な限定されたものをさしている。本説話では、「日々沐浴、潔身(身を)浄(きよ)め家(を)心」といった、身近を清浄に保つ生活態度をさす。菜食が述べられるのも、穢れを去った生活態度ととらえてのこと。下文の精進女問

はく「一夕に心経を誦むこと二百遍ばかりにし、然うして後に目を開きて其の室の裏を覗れば、四壁穿通して庭の中頭見る。吾れ是に希有なる想を生じて、室より出でて廻りて院の内を瞻、還来りて室を見れば壁の戸みな閉つ。すなはち外にまた心経を誦めば開け通ること前の如し。すなはち是れ心波若経の不思議なり」といふ。賛に曰はく「大なるかな釈子、多く聞きて教を弘む。閉り居て経を誦めば、心廓に融ひ達る。現す所の玄寂、いづくにぞ動揺かむ。室の壁開け通り、光明顕に耀く」といふ。

悪しき人乞食の僧を逼して現に悪しき報を得る縁

第十五

昔故京の時に、一の愚人有り。因果を信はず。僧の食を乞ふを見て忿りて繫へむとす。時に僧田の水に走入る。追ひて執ふ。僧忍ぶること得ず、呪を以ちて縛る。愚人顛沛れて東西に狂れ走る。僧すなはち遠く去りて眊眊のと得ず。其の人二の子有り。父の縛を解かむとして、すなはち僧房に詣りて禅師を勧請ふ。禅師問ひて其の状を知りて行き肯へにす。二の子慙重に拝み敬ひ、

父の厄を救ふことを請ふ。其の師すなはち徐に行きて観音品初段を誦み竟りぬ。すなはち解脱かるること得。然うして後にすなはち信ふ心を発し、邪を廻して正に入るなり。

慈ぶる心無く生けながら兎の皮を剥りて現に悪しき報を得る縁 第十六

大和国に一の丈夫有り。郷里と姓名と並に詳ならず。天骨仁なく、生の命を殺すことを喜ぶ。其の人兎を捕りて皮を剥りて野に放つ。然うして後に久しからざる頃に、毒瘡身に遍く、肌膚爛敗り、苦痛むこと比無し。終に愈ゆること得ず、叫号びて死ぬ。嗚呼現報はなはだ近し。己れを怨りて仁ぶべし。慈悲無くあらざれ。

經の引文に「俗家に居住」とあるが、このような生活態度は普通の俗家におけるそれとは対極に位置するものであったろう。在俗の仏教信者の齋日におけるおこないに合致するか。三、奈良県宇陀郡曾爾村。大懷風藻所収の藤原不比等の五言詩・遊吉野に「漆姫控鶴拳、柘媛接魚通」とみえる漆姫が本説話の主人公公証。七、底本訓釈「塩醬」二合、末佐余留已止平。塩も醬も調味料。物事の適合を判断する心。行として外面にあらわれた風俗（みさ）を「すなはち行為」とするのには吉沢義則の説を内面から支える心の状態。へ椅子類を用いないすわり方のひとつ。賢師を地につけて脚を組む。摩訶止観・二上に「結跏趺坐、項脊端直」とある。菩提樹下、端坐六年（無量義經）。唐大和上東征伝の「結跏趺坐」を統紀・天平宝字七年五月六日条は端坐とする。九、底本訓釈「恰かへ安太加太毛」。二、中卷十三縁の吉祥天女にイメージがむすびついている。二、白雉五年公證。三、単なる飛天の意ではなく、白日昇天（道教、生天（仏教）など、死んで天に行く意を含むであろう。三、潮音の説では、「精進女」は「清信女」すなわち優婆夷であり、この経は無垢優婆夷問經（攷証）。引用は取意。経名を「精進女」としているのは、単に同音字を借りただけでなく、このころすでに「精進」に菜食の意が存したか。

第十四縁 善業についての現報説話。三宝絵法七、扶桑略記・齊明天皇案に引用。今昔物語集十四ノ三十二に書承。

一、般若波羅蜜多心經。一卷。般若心經、心經、心般若經、とも称した。般若は「波若」と書かれた。二、未詳。本説話以外に所伝をみない。二六六〇年。七、奈良県高市郡明日香村に所在。天皇は齊明天皇。一八、大阪市天王寺区に所在。堂々芝蔴寺跡がその跡地とされる。一九、未詳。本説話以外に所伝をみない。三、連子窓の内側に明障子が立てられる。その明障子の紙をいうのであろう。上巻四縁には「竊穿坊壁」とあった。二、原文「僧以驚悚」。この二は主語をうけて述語につづいている。

一、般若心經に「菩提薩埵、依一般若波羅蜜多故、心無罣礙、無罣礙故、無有恐怖、遠離顛倒夢想、究竟涅槃」とある。涅槃（結）無し、という経文と本説話の展開とに对应関係があるとする入部正純の説がある。二、教、揺、耀、に押韻をこころみている。三、底本訓釈「融（加与比）二達（至也）」。

第十五縁 悪業についての現報説話。今昔物語集・二十ノ二十五に書承。

四、大乗義章十五に「以何義故、専行乞食」所為有「一、一者為自、省、事修、道、二者為他、福利世人」とあるように、「乞食は仏徒の行であった。ただし、乞食するには官の許可が必要とされた（僧尼令）。五、底本訓釈「遍於比江加之天」。六、平城京からみていう。七、類かたる呪によったか、具体的な記述はない。類似した説話展開をみせる下巻十四縁は「千手呪」とされている。八、底本訓釈「顛沛、上音典反、下音背反、二合云、太不流也」。九、底本訓釈「呵（加へ利見）。〇行こうとしなり。」「不肯」は、一、することを承知しなり。二、妙法蓮華經・觀世音菩薩普門品。三、「即得解脱」（妙法蓮華經・觀世音菩薩普門品）。